

図 10. 和歌山地域の地震波速度構造（東京大学地震研究所 [課題番号：1412]）。稠密臨時地震観測点の分布（左）と測線直下の S 波速度構造の深さ断面図を示す（右）。灰色○印は測線から±10km 以内の再決定震源、赤☆印は再決定された低周波地震の震源を表す。

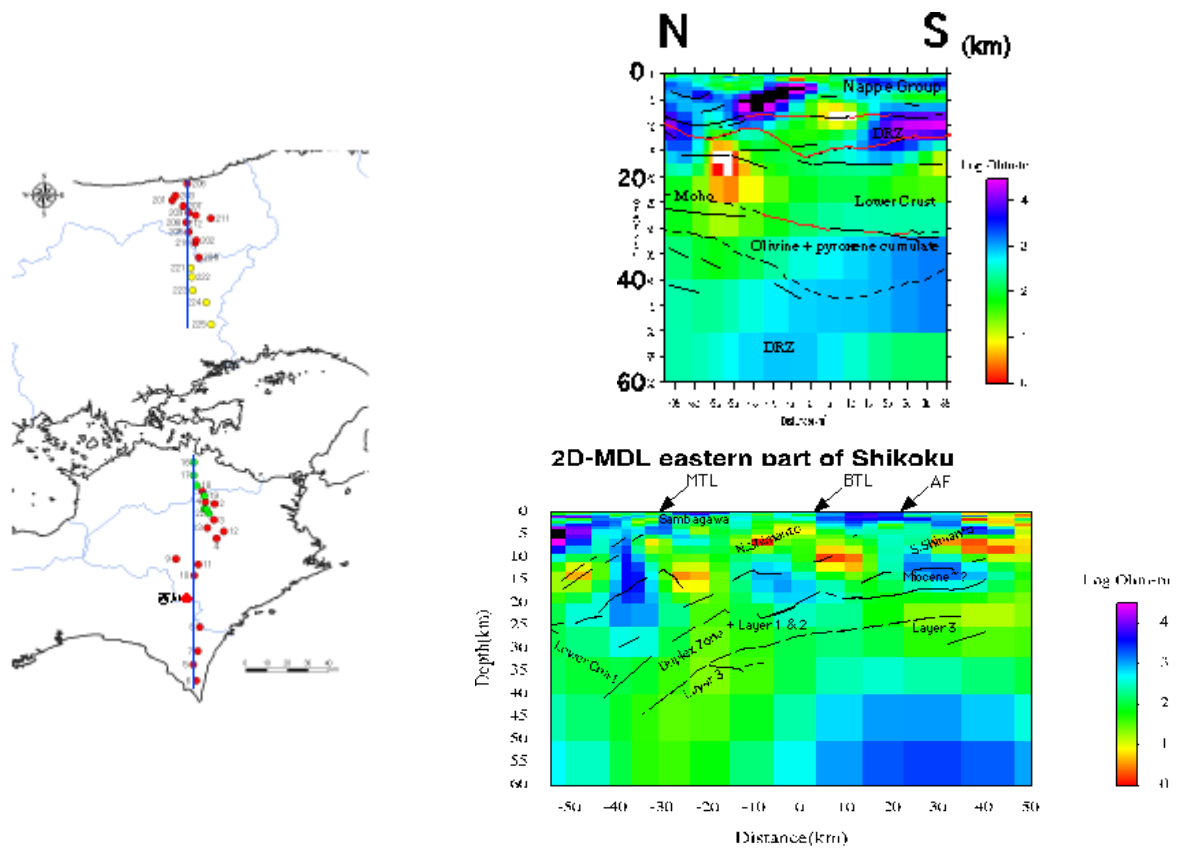


図 11. 中国東部・四国地方東部における広帯域 MT 観測による比抵抗構造（鳥取大学 [課題番号：2001]）。佐藤他 (2005) の推定した地震波反射面及び地質解釈を重ねて示す。左：観測点点配置図。右上：中国東部の 2 次元比抵抗構造。右下：四国東部の 2 次元比抵抗構造。

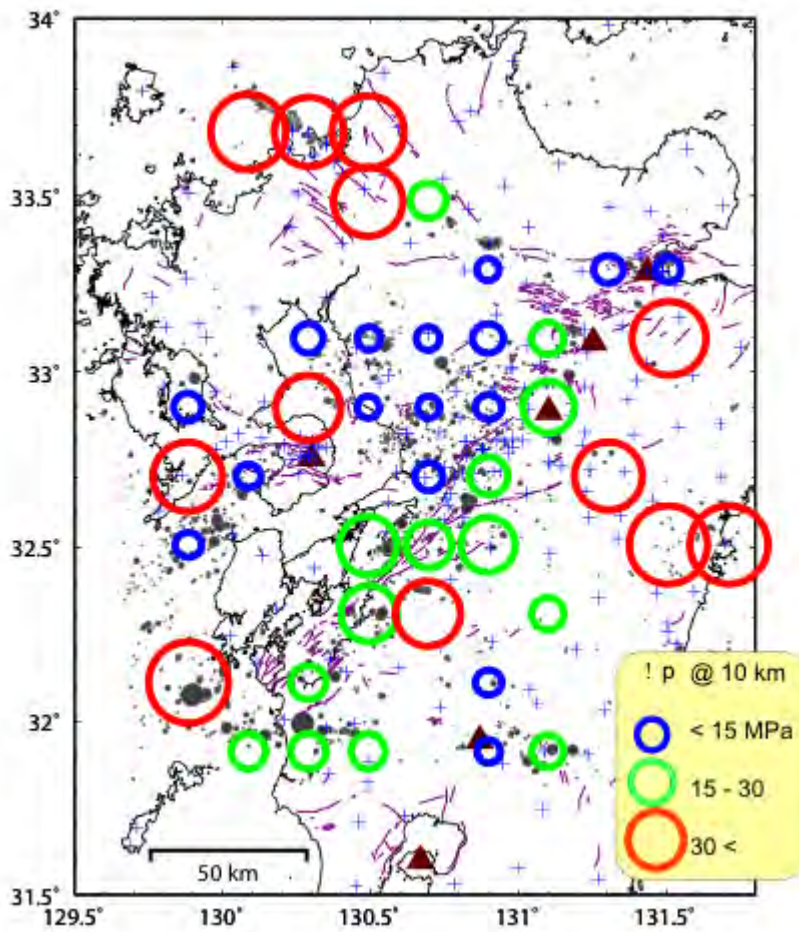


図 12. 応力テンソルインバージョンによって推定された深さ 10km の地殻内の間隙水圧の分布（九州大学 [課題番号：2201]）。間隙水圧はグリッド毎の「平均間隙水圧－静水圧」で示す。

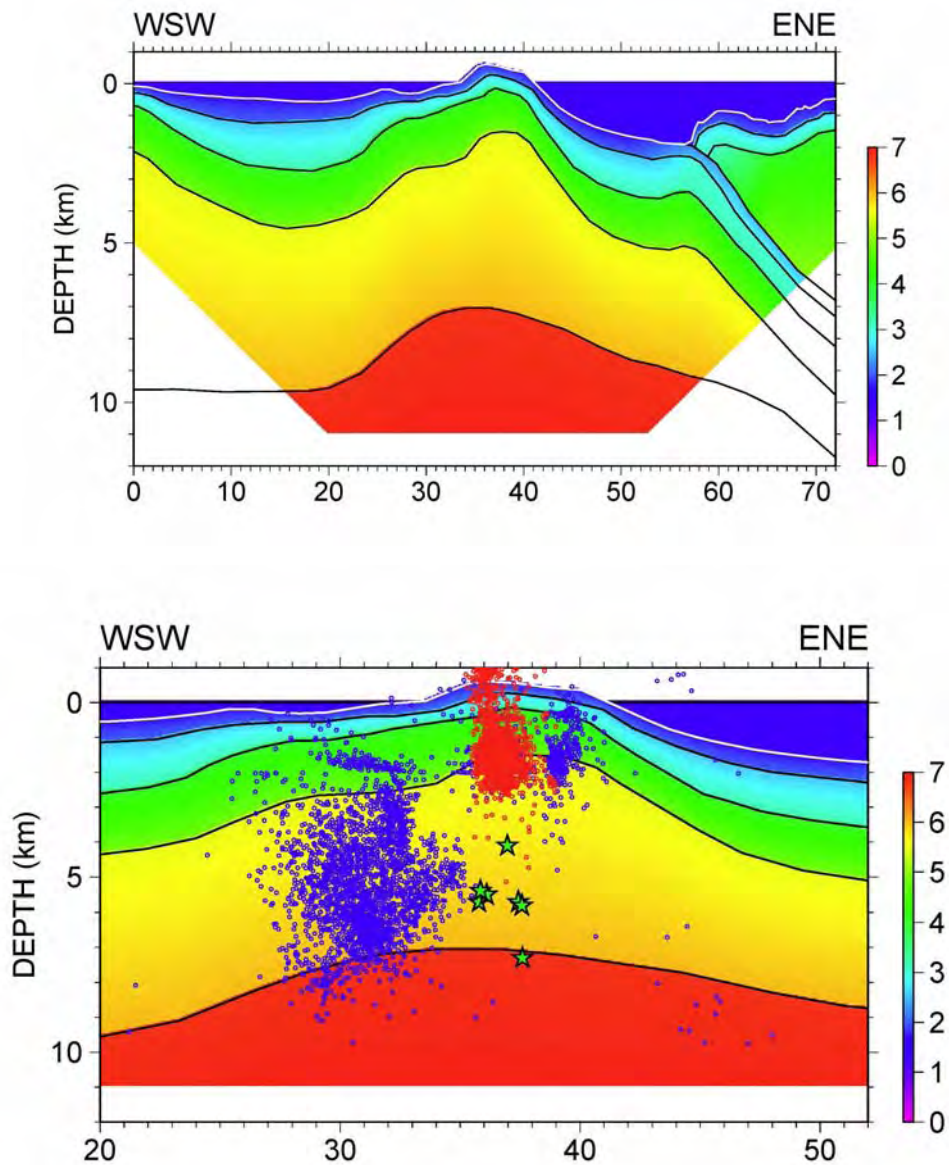


図 13. 2009 年伊豆大島構造探査により得られた速度構造と地震活動の関係（東京大学地震研究所 [課題番号：1413]）。上：エアガンと海中発破からのデータを用いて決定された P 波速度構造。下：伊豆大島におけるカルデラ内の地震（赤丸）、周辺部の構造的な地震（青丸）、マグマ貫入時及び後退時における圧力源の位置（星印）と地震波速度構造の関係。速度構造については上図中央部のクローズアップとなっているが縦横比が違うことに注意。

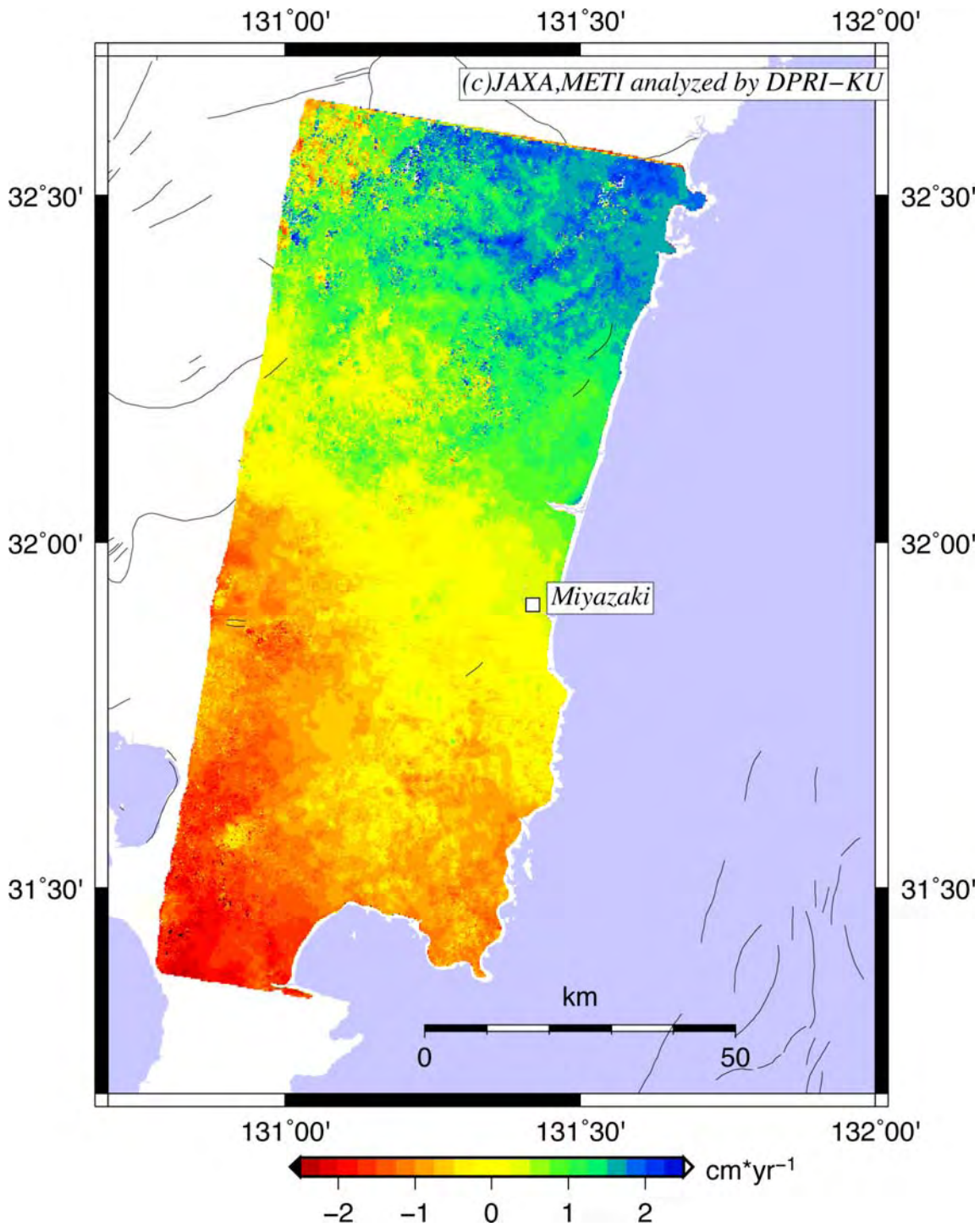


図 14. 日向灘沿岸の ALOS/PALSAR 画像 26 ペアの干渉画像のスタッキング処理で得られた平均視線距離変化速度分布 (京都大学防災研究所 [課題番号: 1805])。南行軌道で撮像された 2007 年 1 月から 2011 年 2 月までの 21 画像から軌道間距離が短い 26 ペアを選んで、干渉解析+スタッキング処理を行った。北から南に向かって距離変化率が減少する傾向が認められる。

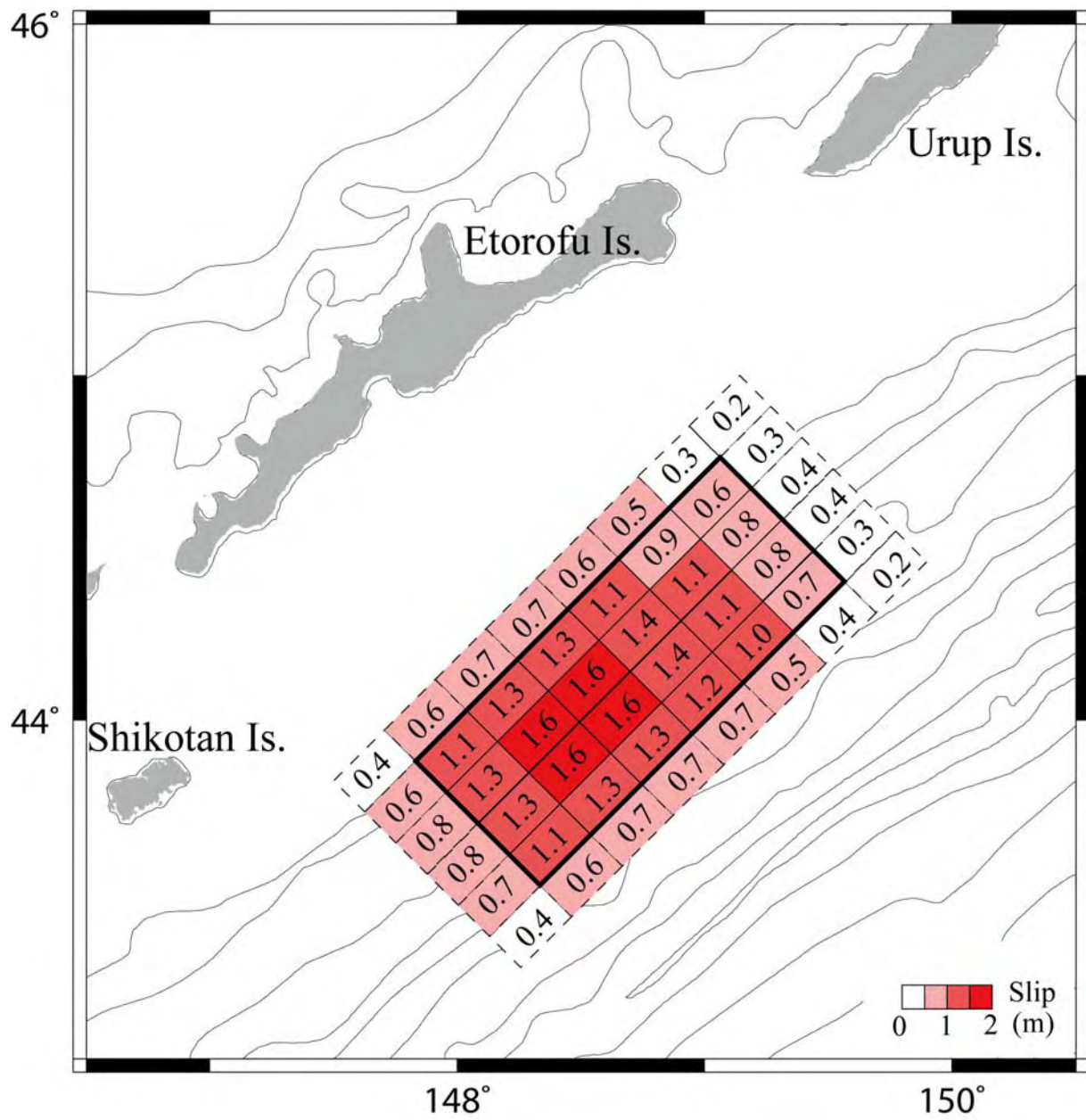


図 15. 津波波形インバージョンから推定された 1958 年択捉沖巨大地震の滑り量分布（北海道大学 [課題番号：1002]）。海底地形のコンター間隔は 1000 m。

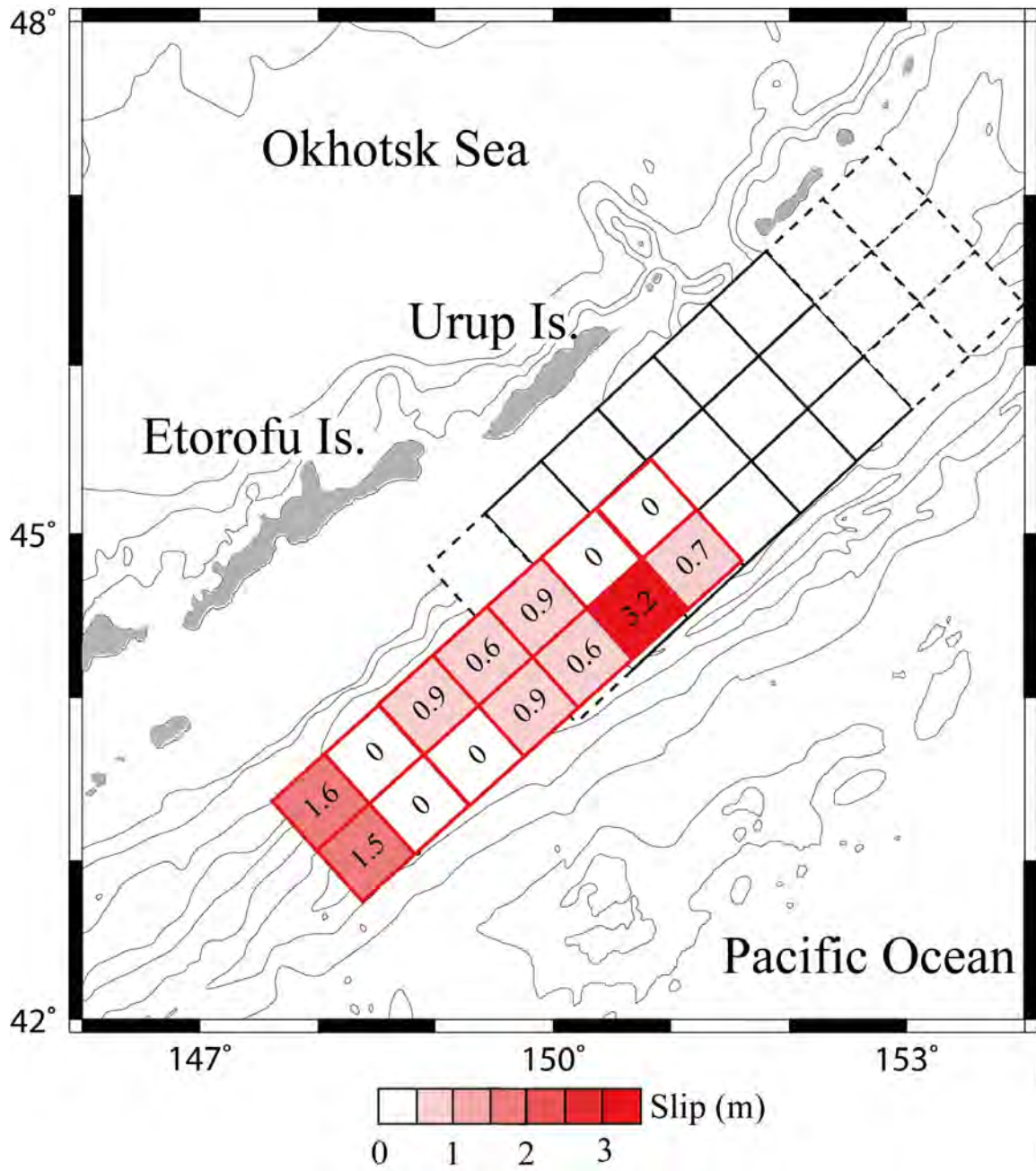


図 16. 津波波形インバージョンにより推定された 1963 年千島沖巨大地震の最大余震の滑り量分布（北海道大学 [課題番号：1002]）。海底地形のコンター間隔は 1000 m。

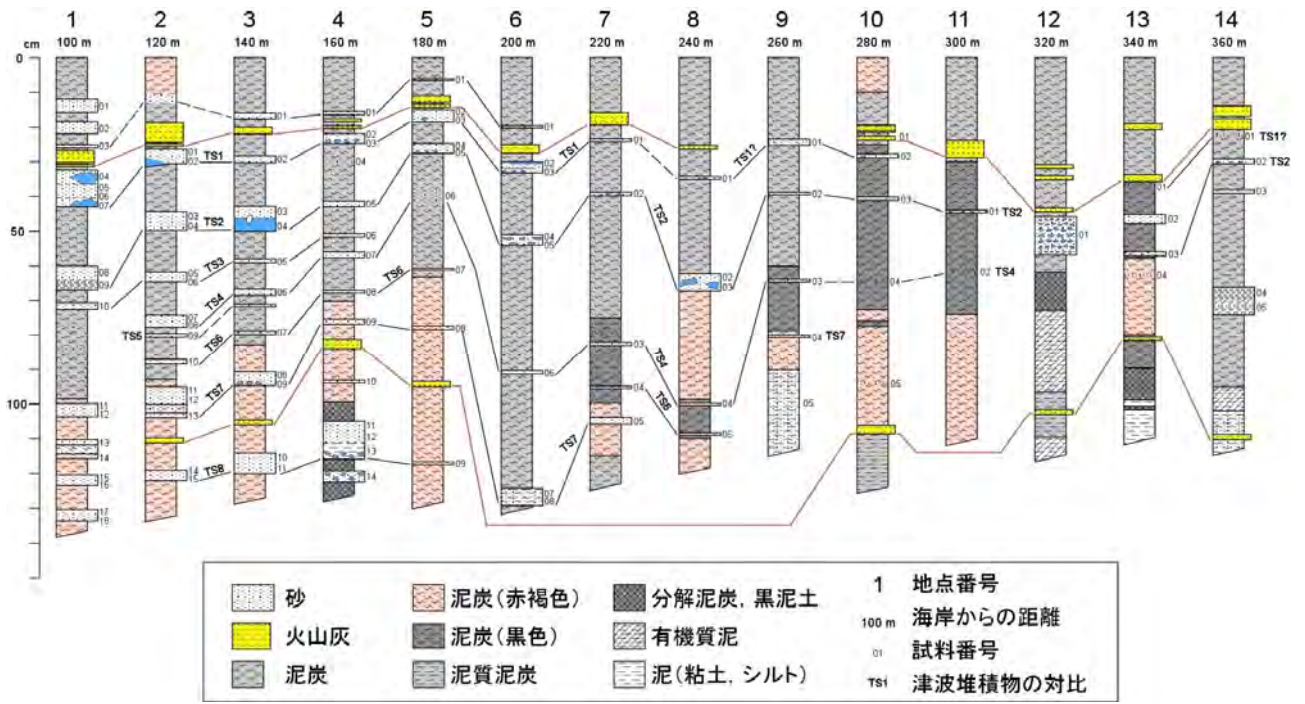


図 17. 根室市別当賀における津波堆積物と示標火山灰の層序（北海道大学 [課題番号：1002]）。